

# 中国古代北方民族の冠

毛利光 俊彦

## I はじめに

筆者は、これまでに日本や朝鮮の古代の冠について論述し、中国古代の冠にも一部言及してきた(文献87・88・90・91)。中国古代でもとくに北方民族の冠は、日本や朝鮮の冠の起源を探る上で重要で、常に注目してきたところである。

中国古代の北方民族の冠や頭飾については、以下の各節で触れるように、すでにくつもの論述があり、かなり様相が明らかになっている。だが、異論もある。

以下では、筆者の知り得た範囲ではあるが、冠や頭飾の資料集成を行い、それらの用法や形状の変化を探るとともに、日本や朝鮮への影響についても簡単に触れることにする。

## II 非歩搖系冠・頭飾

歩搖あるいは歩搖冠は、後述するように慕容鮮卑の標章といわれている。ここではそれとは異って歩搖をもたない冠や頭飾を取上げる。

### 1. 玉箍形器(図1-1・2)

**玉箍形器** 中国北辺の内蒙古自治区東南部から遼寧省西部、河北省北部に広がる新石器時代の紅山文化(前3500年頃、黄河流域の仰韶文化相当 文献24)を代表する玉器の一つである。箍形器、馬蹄形玉箍、箍形玉飾などとも呼ばれている。

玉箍形器の特徴や用法については、2003年に吉向前(文献63)が資料を集成し、学説を整理している。玉箍形器の形状は一端を斜口、他端を平口とした筒形で、長さはほぼ8~18cm、斜口長径はほぼ7~10cm、平口長径はほぼ5~8cmである。平口部近くに左右一対の孔を穿つ例(図1-1・2)が多いが、3孔の例や孔のない例もある。出土位置は頭部例(図1-1)が多いが、腰部例(図1-2)もある。

用法については、①髮箍説(李恭篤1986年提唱、文献26)、②撮取説(林巳奈夫1989年提唱、文献85)、③臂甲説(那志良1990年提唱、文献31)、④通天器説(楊美莉1993年提唱、文献34)の4説があり、吉向前は④通天器説を採用している。

①髮箍説は頭部出土例に依拠している。遼寧省の凌源市と建平県にまたがる牛河梁の紅山

文化墓では頭部出土例が多く、玉箍形器も束髪器と呼んでいる(文献48)。

②撮取説は斜口部に摩耗があることから、穀物などを掬った器で、もとは牛の上腕骨を用いていたものが玉祭器になったと推測する。

③臂甲説は腰部出土例に依拠し、1993年に秋山進午(文献86)も腕飾と推測している。

④通天器説は、神に祈るときに捧げ持った通天通神の器とみ、埋葬時に頭部に置いたと推測している。また、孔は紐を通して腰に佩用したと推測している。

他に1998年に劉国祥(文献54)は、牛河梁の墓に立てられた円筒形の彩陶が宗教儀礼器に変化したと見解を示している。

以上の諸説のうち、②・③は頭部出土例が多いことを説得できない。④は頭部と腰部から出土したことを説得したようにみえるが、通天器なるものの存在自体が疑わしい。出土状況からみると、①こそ最も説得力がある。

**玉人** 玉箍形器を髮箍(束髪器)とする説の参考となるのは玉人(図1-5～8)である。玉人については杜金鵬(文献35・36・47)が集成・論述している。関係する部分を抜粋すると、乙類D型の米国スミソニアン美術館藏品(図1-5)は江西省新干商墓出土品(図1-7)と同類だが、やや古く新石器時代の龍山文化晩期に上る可能性があること、これらの玉人が神像であること、頭部の箍形器とこの上の羽とみる部分全体が冠(高羽冠と命名)であることとなる。

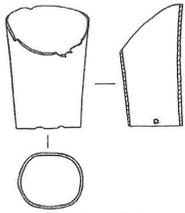
一方、河南省の安陽小屯商墓出土玉柄(図1-8)は箍形器がさらに低く額带状になり、陝西省豊西周(前1027～前771年)墓出土玉器(図1-9)では羽状の表現もなくなる。玉人にみる箍形器は高い程古く、スミソニアン美術館藏品やこれと酷似した商代の玉人(図1-6)は紅山文化の玉箍形器に連なることを想起させる。

上述の杜金鵬が羽とみる表現は、安陽小屯墓例(図1-8)ではそれらしくみえるが、他の玉人の例(図1-5～7)が羽表現かは問題である<sup>1</sup>。紅山文化の玉箍形器との関連を考えると、束ねた髪を高く誇張した可能性もあろう。

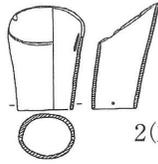
## 2. 勾雲形玉器(図1-3)

紅山文化の遼寧省凌源県三官甸子2号墓では、死者の頭部から勾雲形玉器(図1-3)が出土している。裏面に4対の孔があることから、帽に綴じ付けたと解している(文献26)。これに対して、1988年に勾雲形玉器を分類・検討した杜金鵬(文献53)は、頭部出土例が唯一で、寸法も横22.5cmあることから、冠用であることに疑問を示し、佩玉と推測している。ただし、安陽小屯商墓では、勾雲形玉器に類似した貝殻製の飾りを額帯に用いたと推定(図1-4)しており、勾雲形玉器が紅山文化のなかで頭飾に用いられた可能性も否定しきれない。

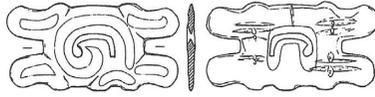
なお、三官甸子2号墓では腰部から玉箍形器が出土している。勾雲形玉器を額帯とすると、玉箍形器は髪から取りはずし、腰部付近に副葬したことになる。他の腰部出土の玉箍形器もそうした状況を推測しておく。



1. 遼寧・牛河梁7号墓玉箍形器  
(紅山文化)



2(左)・3(右). 遼寧・三官甸子2号墓玉箍形器、  
勾雲形玉器(紅山文化)



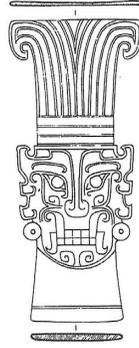
4. 河南・安陽商墓  
貝飾



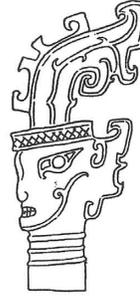
5. スミソニアン美術館玉人  
(龍山文化晩期)



6. 商代玉人



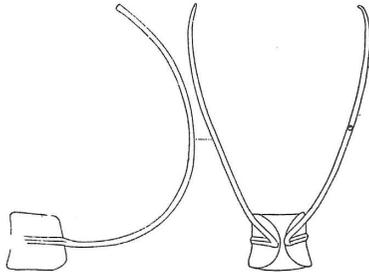
7. 江西・新干墓玉人  
(商代)



8. 商代玉人



9. 陝西・禮西墓玉柄  
(西周代)



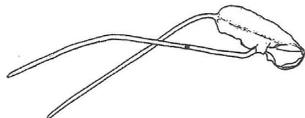
10. 遼寧・保安寺墓銀頭飾  
(3C初頭)



13. 山西・侯馬牛村陶範  
(春秋期)



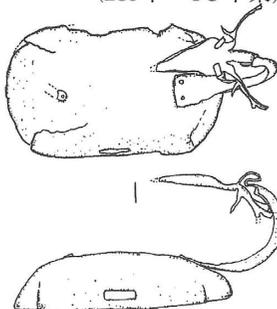
14. 内蒙古・阿魯柴登金冠  
(春秋中・晩期～戦国)



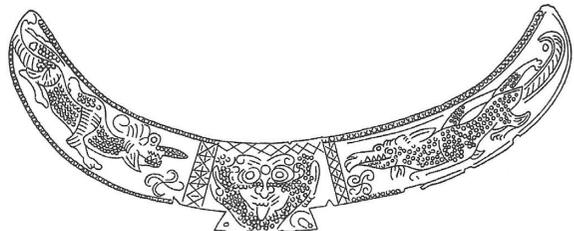
11. 遼寧・喇嘛洞II M328号墓銅頭飾  
(289年～4C中葉)



15. 陝西・神木金冠飾  
(戦国晩期)



12. 遼寧・喇嘛洞II M266号墓銅臥鹿形飾  
(289年～4C中葉)



16. 内蒙古・呼和浩特金冠飾  
(北魏)

図1 中国古代北方民族の冠・頭飾I

1~3 1:8、5・9 1:2  
10~12・15 1:5、14・16 1:3

### 3. 双角頭飾(図 1-10・11)

双角頭飾は遼寧省内で2例が知られている。1例は、古く1963年に報告された義県保安寺墓出土銀製品(図 1-10)で、高さ3.8cm、下端径4.2cm、上端径3.4cmの籬形器に彎曲する角状飾を取付けている。この墓について、報告者の劉謙(文献3)は後漢(25~220年)末~晋代の烏桓人墓と推定したが、1977・1984年に宿白(文献9・84)は後述する遼寧省北票房身村2号墓より少し古く、後漢晩期の内蒙古自治区呼和浩特東北方の二蘭虎溝遺跡に近い時期に比定し、副葬品が拓跋鮮卑と慕容鮮卑の両要素をもつことも指摘した。2002年の遼寧省文物考古研究所編『三燕文物精粹』も宿白の年代観をうけ、保安寺墓を3世紀初、房身村2号墓を3世紀中葉としている。

用法について、劉謙は保安寺墓例が頭部から出土したことを根拠に、『後漢書』「烏桓伝」の鉤決に比定している。その「烏桓伝」は「婦女至嫁時、乃養髮分為髻、着句決、飾以金碧、猶中国有籬步揺也」とある。「句決」について、1983年に陳大為(文献20)は髻を整える時に髪を分ける道具とみて、簪のような物を考え、保安寺例は髻のなかに入れてこれを支える「髻骨」と推定した。それは『晋書』「五行志中」の太元中(376~396年)条に、公主婦女が髻を高く飾るにあたって木や籠の上に装うようになったとする記述による。だが、保安寺例は髻を支えるのに適しているとは言い難い。

双角頭飾の他の1例は、北票市喇嘛洞ⅡM328号墓出土銅製品(図 1-11)で、前燕(337~370年)早期かやや古い時期の289年~4世紀中葉に比定し、「束髮器」としている(文献64)。変形しているため詳細不明だが、籬形器は保安寺墓例とやや異なり、上下に開口せず、左右に開口しているようである。とすると、髪を束ねるというより、頭に載せるか、頭頂の小さな髻をつつむ巾子、たとえば前漢(前202~後8年)の洛陽壁画墓例(文献5)のような用法が推測される。

1987年に烏恩(文献27)は、髮弁(弁髮)の出土資料や壁画資料を検討するとともに、『後漢書』「烏桓鮮卑伝」などをひき、烏桓人と鮮卑人は習俗が同じ「髡頭<sup>2</sup>」であり、その髮弁は「一小段」すなわち短くて少ないこと、これに対して匈奴人の髮弁は「長弁」で多条であることを示した。1979年に李逸友(文献13)は、『三国志』の『魏書』「鮮卑伝」の注に引く王忱の『魏書』の記載から鮮卑人が「髡頭」であることを示し、『宋書』「索虜伝」や『南齊書』「魏虜伝」に拓跋鮮卑が「索頭」であるとするのも「髡頭」と同じとした。とすると、先述した保安寺墓出土の頭飾は、烏桓・鮮卑人の短くて少ない髮弁を束ねていた可能性が出てくる。その源流は玉籬形器に遡るのであろう。

保安寺例にやや遅れる喇嘛洞ⅡM328号墓例が巾子的な物とすると、髻を結ったことになる。喇嘛洞の三燕時代の墓地については、慕容鮮卑以外に東方の扶余人も埋葬されたとする2003年の田立坤の見解(文献61)があり、注意を要する。というのは、喇嘛洞ⅡM328号墓と

ほぼ同じ時期に慕容鮮卑は後述する歩揺冠を用いているからである。328号墓の双角頭飾が慕容鮮卑に歩揺冠と併用されていたのか、時期差があって双角頭飾が古いのか、あるいは慕容鮮卑とは異なる扶余人らの特色を示すのか。後二者の可能性を考えたいが、究明は今後の課題である。

なお、上記2例の角状飾は、巻きが弱く牛角的である。角牛のモチーフは、内蒙古鄂爾多斯の匈奴墓(文献93)や前1～後1世紀の新疆吐魯番・交河故城城北区墓(文献25)の帯金具などにあるが、写実的で角も太い。『後漢書』『烏桓伝』『鮮卑伝』ではともに牛・馬・羊、「扶余伝」では牛・馬を養っていたことを示しており、この地域で牛角を頭飾とする風習があったとしてもおかしくない。既述した玉人の箍形器(図1-5・6)にも角状の表現が目されるが、巻きが強い。角とすれば山羊・羊であろうが、定かではない。

#### 4. 鹿飾冠(図1-12・15、図版5-3)

**臥鹿形飾** 遼寧省北票市喇嘛洞の大型墓である。I M5号墓とI M17号墓(図版5-3、文献59)、II M266号墓出土銅製品(図1-12)の3例が知られている。腰部から出土しており、後で触れる鉛鹿首形飾とともに、鎮墓・避邪用と推測している(文献64)。だが、臥鹿形飾は鹿の体部両側面に長方形孔があり、ここに紐帯を通して頭に固定した可能性が高い。鹿の体部は、266号墓例だと長さ14.5cm、幅8.8cmで中空になっており、頭に載せるにふさわしい。頭への固定方法については、冠の形状は異なるが、洛陽西周墓の馬轆人物像(文献18)が参考になる。鹿を冠飾に用いることも、次述する匈奴例にあり、奇異な解釈ではない。

喇嘛洞II M266号墓は、男女合葬で、男子の頭部から金釵と緑松石飾、腰部から臥鹿形飾が出土している。年代は289年～4世紀中葉に比定している(文献64)。5号墓と17号墓は、詳細未報告だが、前者は男子単葬で、頭部とその近くから銀釵と「山」字形銅飾、腰部から臥鹿形飾が出土している(文献59)。5号墓の年代は266号墓とほぼ同じである(文献61)。ともに埋葬時には、臥鹿形飾は着装せずに、別の装いをしたのであろう。既述したように、これらの臥鹿形飾が慕容鮮卑の標章なのか、扶余人の標章なのかは定かでない。

**立鹿形飾** 陝西省神木県の戦国(前470～前221年)晩期の匈奴墓である納林高兔墓出土金冠頂飾である(図1-15)。脚台は、中央が盛上がった四花弁形で、弁ごとに3孔を穿っている。類例は前5・6世紀のロシア・クラスノヤルスク出土青銅製冠(文献83)などがある。それらによると、冠本体は半球状の帽になり、上述の臥鹿形飾とは趣を異にする。

**鉛鹿首形飾** 鹿首のみを鉛錫合金でつくったものである(文献64)。既述したように、喇嘛洞の289年～4世紀中葉の墓では胸・腰部からの出土例があり、鎮墓・避邪用とみている。鹿の立体像は匈奴墓(文献19など)にかなりあるが、鹿首のみをつくるのは喇嘛洞の特徴のようである。鹿首に細長い鉄板を差し込んでいる例(文献64)があることからすると、これを死者に持たせるとか、棺に立てるとか、祭祀色の濃い遺物といえる。

## 5. 鳥翼飾冠(図1-14・16)

**鳥飾冠** 内蒙古自治区の中央部にあたる伊克昭盟阿魯柴登の匈奴墓出土金冠である(図1-14)。両翼を広げた鷹を頂部に立て、冠本体は半球状の帽状につくる。帽の表面に狼・羊を打出すが、孔はないようである。冠に紐をからめて着装したのであろうか。報告者はこの下に金製冠帯がつくとしているが、類品を首飾とみる説(文献93)もある。時代は、報告者は春秋(前771～前470)～戦国(文献15)とするが、烏恩(文献58)は春秋中晩期～戦国晩期の前7C～前3C、姜涛(文献65)は戦国期に比定している。

内蒙古自治区の東辺部にあたる哲里木盟毛力吐の鮮卑墓からも、翼を広げた鳳凰の金製冠頂飾が出土している(文献55)。阿魯柴登例とは、鳥の形が異なり、鳥翼に円形歩揺をつけている点も異なる。脚台はやや盛上がった円形板で、4孔があり、冠本体は半球状の帽と推測できる。報告者は後漢早・中期に比定している。

**翼状飾** 内蒙古自治区呼和浩特市華克齊鎮の墓から出土した金製品である(図1-16)。左右長21cmの大型品で、中央下端の張出部両端に孔を穿つ。額帯か帽の前面に綴じつけたのであろう。左と右に蜥蜴か鱷、中央に舌を出した胡人風の顔を表す。工事中の出土品であるが、伴出したササン朝ペルシャの金貨は457～474年頃の時期とされる。北魏に相当するが、翼状飾が拓跋鮮卑のものかは定かでない<sup>3</sup>。

類例は古く春秋期の山西省侯馬牛村出土の陶範に表わされた人物の頭部(図1-15)や河北省中山県の戦国墓出土玉人の頭部(文献12)にみられる<sup>4</sup>。牛角の可能性もなくはないが、幅広である点からすると、むしろ後述する朝鮮の鳥翼形冠飾に近い。

**月牙形飾** 1981年に孫国平(文献16)は、遼寧省内の慕容鮮卑の冠飾を集成・論述したなかで、月牙形飾4例も冠飾の一種とした。だが、いずれも両端にのみ孔があり、古く1960年に陳大為(文献1)が推測したように垂飾とすべきである。類例は匈奴墓にもある(文献39)。中国の西周時代以降、漢代にも残る佩玉の璜(文献21・43)がそれにあたる。

## Ⅲ 歩揺系冠

### 1. 研究略史

歩揺冠の初出例は1960年の陳大為による遼寧省北票市房身村2号墓の報告(文献1)で、氏はこれが慕容鮮卑の冠と推測した。1973年に黎瑤渤(文献6)は、415年に没した北燕の馮素弗墓出土歩揺冠について『晋書』「慕容廆載記」をひき、三国時代(222～265年)の燕代地区に流行したこと、冠前面には秦漢以来、侍中らが用いた「金璫」をつけたことなどを指摘した。

『晋書』「慕容廆載記」は、鮮卑人の慕容廆(284～333年)の祖父である莫護跋が曹魏(220～265年)初に諸部を率いて遼西に入り、238年に棘城の北に建国したこと、時に「燕代多冠歩揺冠」

という状況であり、莫護跋はこれを見て気に入り、「斂髮襲冠」すなわち髪を束ねて歩揺冠を被るようになったこと、諸部はこれを歩揺と呼び、後に音が訛化して慕容となり、慕容部の名ともなったことを録す。

1977年に宿白(文献9・10)は、考古遺物・遺跡と文献資料を用いて慕容鮮卑と拓跋鮮卑の移動を跡付けるとともに、慕容鮮卑の房身村墓を3・4世紀の西晋相当期と推定した。

1981年に孫国平(文献16)は、遼寧省出土の歩揺冠飾を集成し、花樹状歩揺を冠前面につける一型、頂花状歩揺を冠頂、山形冠飾を冠前面につける二型、山形冠飾をつける三型、月牙形冠飾をつける四型(四型は既述したように胸飾)に区分するとともに、これらが慕容鮮卑の遼西遷入後の遺物であること、房身村2・8号墓が3世紀末～4世紀初すなわち棘城遷居(294年)～龍城遷居(342年)、朝陽県姚金溝2号墓や袁台子3号墓が4世紀で龍城遷居前後～後燕(384～409年)、朝陽県西団山墓や王墳山(王子墳山)1号墓が4世紀末～5世紀初すなわち後燕～北燕(409～436年)にあたることを推測した。同年の董高(文献17)による馬具からみた編年では、房身村8号墓は3世紀末～4世紀初、姚金溝2号墓は4世紀前期に近い時期とするが、1995年の董高編年(文献41)では後者を384～409年とする。1987年に徐基(文献28)は、慕容鮮卑墓について遺跡・遺物を総合的に検討し、編年の大綱をつくった。このなかで、房身村8・1～4号墓は第二組(第3段)、3世紀中葉～4世紀初の西晋(265～316年)相当期とした。

1991年に田立坤(文献32)は、遼西の慕容鮮卑墓を再編年し、新発見の朝陽県十二台郷磚廠墓群を第1段階(曹魏初～289年)、房身村1～3号墓を第2段階(289～337年)の前燕(337～370年)以前の時期に比定した。同年に孫機(文献33)は、房身村2号墓や馮素弗墓例も取入れて、歩揺冠が前1・2世紀頃に西・中央アジアに出現し、それが東伝して朝鮮や日本にも及んだことを豊富な挿図で示した。歩揺東伝については1996年に徐秉琨(文献42)も論述している。

2002年の遼寧省文物考古研究所編『三燕文物精粹』では、新資料を加えて金製歩揺冠飾例が計16点あること、北燕の馮素弗墓例と王子墳山1号墓例が新しいが、他はいずれも前燕建国(337年)以前の早期鮮卑墓の標章的遺物であることを示し、房身村2号墓を3世紀中葉とした。さらに、房身村2・8号墓と袁台子3号墓のように1墓で大小2点の金製歩揺が出土している例は、「一冠双飾」すなわち冠の前面に小を下、大を上にして一緒に釘綴したこと、歩揺冠飾の東伝については、上述した1991年の孫機や1996年の徐秉琨の成果を踏まえ、西・中央アジア→前・後漢の中国(「漢式歩揺文化」)→1～3世紀の燕代地域(今の内蒙古自治区東南～河北省西北部)への波及を考え、この燕代地域で形成された「多冠歩揺冠」といった贅沢な風習と、別に北の草原の道を通して東伝した歩揺文化が融合し、遼西の早期慕容鮮卑の歩揺文化を生み出したことも推測している。なお、2003年に田立坤(文献61)は、三燕文化墓地を早期(曹魏初～289年)、中期(289～370年)、晩期(384～436年)に大区分し、唯一、金製歩揺冠飾を出土した北票市喇嘛洞I M7号墓が三燕文化中期(とくに289～350年)に属するが、喇嘛洞の三燕中期の墓葬主体は扶余人ではないかという重要な提言をしている。

## 2. 歩揺冠(図2-1～4・10・12、図版4-1～5、5-1)

**遼西地方** 2003年の万欣(文献62)の集成によると14点<sup>5</sup>あり、うち12点は3世紀中葉～4世紀早期で、前燕(337～370年)以前のいわゆる早期慕容鮮卑の時期、残る2点は北燕(409～436年)かそれに近い時期とする。いずれも金製品である。

早期慕容鮮卑墓例は、板状の牌座(山題)の上に、放射状にのびる花樹状飾をつくり出す(以下、I類)。通常は牌座の四角に孔があり、帽の前面に釘綴したと考えている。以下、牌座や花樹状金飾の形状からA～D種に大別して略述する。

A種は、北票市房身村8号墳墓例(文献16)で、相似た形の大小各1点がある。牌座は葫蘆(ひょうたん)形に近く、花樹状飾は扇状に8枝を派生させ、基部に塔形状の透孔を穿つ。この主幹に支幹が伴うか否かは明らかでない。

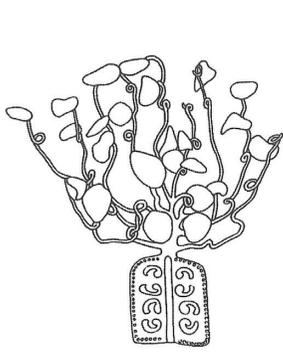
B種は、牌座がなで肩の長方形で、三葉文の透彫と周囲に列点文を飾る。花樹状飾は、基部に透孔を穿ち、この主幹の前に小さな支幹を取付けるのが通例である。4亜種に細分する。B<sub>1</sub>種は、房身村2号墓出土の小型品(図2-1)で、主幹の透孔が塔形状に5段と細かく、枝は12枝である。同墓の大型品(図版4-1、文献59)もほぼ同様だが、枝は16枝と多い。B<sub>2</sub>種は、朝陽県甜草溝1号墓出土の大小2例(図2-2、図版4-2)で、B<sub>1</sub>種に似るが、主幹の透孔が3段の葫蘆形で、枝が11枝である。B<sub>3</sub>種は、朝陽県十二台郷8713号墓例(図2-3、図版4-4)で、主幹の透孔が2段と簡略であり、枝も6枝と少ない。牌座も列点文がない。朝陽県袁台子3号墓出土の小型品(文献16)もこの種か。B<sub>4</sub>種は、北票市喇嘛洞IM7号墓例(図版4-5、文献59)で、B<sub>3</sub>種に似るが、牌座は透しも列点文もない。枝は7枝である。朝陽県西団山墓例(文献16・40)もほぼ同巧だが、枝は9枝である。

C種は、袁台子3号墓出土の大型品1例(文献16)で、詳細不明だが、牌座に菱形の透孔がある。枝は5枝である。

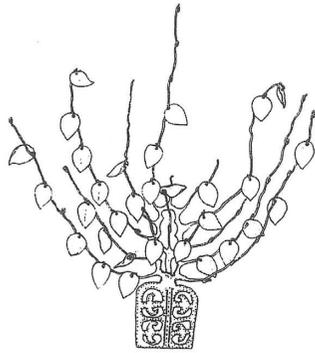
D種は、甜草溝2号墓例(図2-4、図版4-3)で、牌座はB<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>種とほぼ同巧だが、花樹状飾は幹が1本で透しもない。枝は5枝で、先でさらに分岐するという他にみない特徴をもつ。

年代については、これまでの見解もあわせて示すと、A種とB<sub>1</sub>種の房身村2・8号墓が3世紀中葉～4世紀初あるいは3世紀末～4世紀初(文献32)、B<sub>2</sub>種とD種の甜草溝1・2号墓が房身村よりおくれ3世紀晩～4世紀前葉(文献51)、B<sub>3</sub>種の十二台郷8713号墓が曹魏初～337年(文献49)あるいは3世紀中期～4世紀早期(文献62)、B<sub>4</sub>種の喇嘛洞IM7号墓が3世紀末～4世紀初(文献62)あるいは289～350年(文献61)、C種の袁台子3号墓が3世紀末～4世紀初(文献62)あるいは4世紀末～5世紀初(文献16)となる。

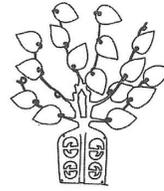
3世紀中葉に遡る可能性があるのはA種とB<sub>1</sub>・B<sub>3</sub>種だが、その後に続かないA種がB<sub>1</sub>種に先行する可能性を取り、A種を3世紀中・後葉に比定しておく。慕容廆が採用した冠かその系列に属する冠になろう。B種では、表現が簡略化されたB<sub>2</sub>種がB<sub>1</sub>種より年代が新しく、さ



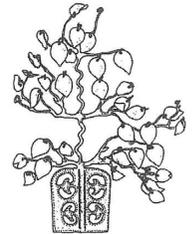
1. 遼寧・房身村2号墓基金步搖飾 (3C後葉~4C初)



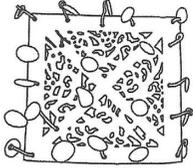
2. 遼寧・甜草溝1号墓基金步搖飾 (3C晚~4C前葉)



3. 遼寧・十二台鄉 8713号墓基金步搖飾 (3C中葉~4C早期)



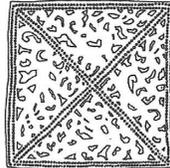
4. 遼寧・甜草溝 2号墓基金步搖飾 (3C晚~4C前葉)



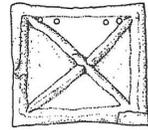
5. 遼寧・房身村2号墓基金板飾 (3C後葉~4C初)



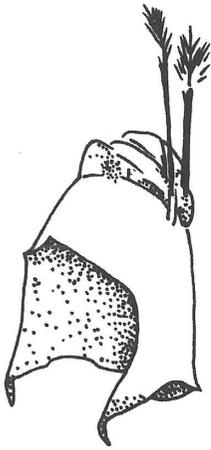
6. 遼寧・甜草溝1号墓基金板飾 (3C晚~4C前葉)



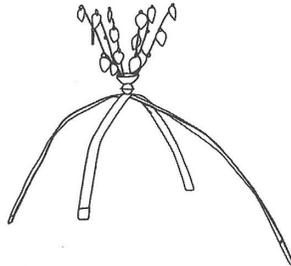
7. 遼寧・甜草溝1号墓基金板飾 (3C晚~4C前葉)



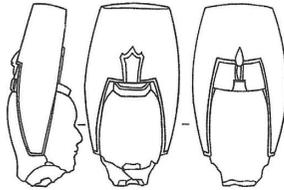
8. 遼寧・甜草溝2号墓基金板飾 (3C晚~4C前葉)



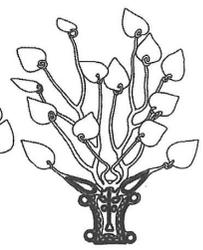
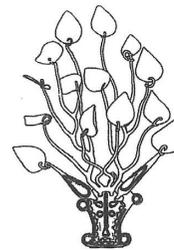
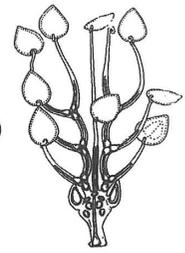
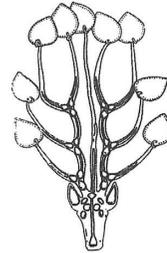
9. 新疆・楼蘭フェルト帽 (漢代)



10. 遼寧・馮素弗墓基金步搖冠 (415年)



11. 北魏・永寧寺大冠塑像 (6C前葉)



12. 内蒙古・達茂旗金步搖飾 (北魏代)



13. 江蘇・仙鶴觀墓基金璫 (東晋早期)



14. 日本・白鶴美術館金璫 (六朝)



15. 遼寧・馮素弗墓基金璫 (415年)



16. 遼寧・馮素弗墓基金璫 (415年)

図2 中国古代北方民族の冠II

1~4・9~11 1:6, 12 1:5  
5~8・14~16 1:4, 13 1:3

らに簡略なB<sub>2</sub>種の年代は下る見解もある。したがって、大筋では3世紀後葉から4世紀前葉に、B<sub>1</sub>種からB<sub>2</sub>種に順次変化するとともに、C・D種も派生したと推測できる。

北燕あるいは遼を経て後燕(384~409年)には、次述するように新しい歩揺冠が登場するが、前燕(337~370年)の歩揺冠は明確でない。ただし、参考となる資料はある。前燕の朝陽県十二台郷88M1号墓の頭部位置で出土した金製歩揺飾である(文献50)。遺存状態が良くないが、金線を振って水平に幾列かの枝を出し、歩揺をつけ、基底を「長条形銀片」に固定した例である。長条形銀片が帽の枠とすれば、後述する北燕の冠に類似するが、歩揺飾は異なる<sup>6</sup>(以下、Ⅱ類)。後述するように十二台郷88M1号墓では山形板飾も頭部近くから出土している。前燕早期にⅠ類が残るのか、Ⅱ類に全く変わるのかは今後の研究課題である。Ⅱ類の類例は他に、朝陽市博物館蔵金製品がある(文献38)。歩揺飾の基部に鉄片があり、馬具の寄生とするが、冑飾かもしれない<sup>7</sup>。

北燕(409~436年)の歩揺冠は、415年に没した馮素弗墓例(図2-10、図版5-1)で、板金を十文字に組んだ頂部に放射状の花樹状飾をおく(以下、Ⅲ類)。十文字板金は有機質の帽に綴付け、そのうちの短い1本が正面(山形飾を取付ける点は後述)と推測されている。冠本体は頭を包むような形状となる。花樹状飾は、球体の上につけた半球形の基座に、6枝を放射状に配置する。朝陽県王子墳山1号墓例も、ほぼ同工だが、花樹状飾が8枝である(文献16)。報告者は後燕(384~409年)から北燕前後、4世紀末~5世紀初に比定している。

馮素弗墓の冠本体に類似した例は、新疆自治区桜蘭の漢相当期の鳥羽を挿したフェルト帽(図2-9)などにあり、北方民族の防寒用と考えられている(文献60)。商・西周の青銅製冑(文献11)や遼寧省錦西春秋晚期墓(文献37)の青銅製冑も形状が近い。いずれも頂部に有孔の突起をもつ。小札を用いた類似の鉄製冑は中国では戦国(文献29)から漢(文献52)、さらに北朝晩期(文献44)の出土例もある。おそらくこうした冑の形制が遼西の歩揺冠の本体に採用されたのであろう。

**内蒙古自治区** 内蒙古自治区の中央部にあたる烏蘭察布盟達茂旗西河子出土の金冠飾である(図2-12)。4点あり、うち同工の2点は牌座が馬面形、他の同工2点は牌座が牛面形である。牌座には釘あるいは釘綴孔が残る。いずれも顔面は金粒で縁取り、各所をガラスで象嵌する。前者の2点(図2-12上)は頭に鹿角1対とその中央に直線的な一角を造出すのに対して、後者の2点(図2-12下)は鹿角が大小各1対で、これと耳を別造りにして頭部に差し込む点で異なる。

その年代について、報告者の陸思賢と陳棠棟(文献22)は北魏と推測している。拓跋鮮卑の歩揺冠ということになる。拓跋鮮卑の歩揺飾は後漢相当期まで遼と推測(文献13)されているが、それは骨簪に「螺旋形銅飾」1点と「骨串珠」5点を取付たもので、かなり形態が異なる。

**漢の歩揺冠** 1973年に黎瑤渤(文献6)は、馮素弗墓の歩揺冠に関する註で、『前漢書』『江充伝』に

「禪襪歩揺冠」、『後漢書』『輿服志』の皇后条に「歩揺以黄金為山題」とあることを示している。

女性が髻に歩揺を飾った例は、先人がすでに指摘するように、前漢の長沙・馬王堆1号墓出土帛画や東晋の「女史箴図」(文献18・33・42)などにあり、『隋書』『礼儀志』の梁制条や後齐(北齐)制条にも「仮髻歩揺」としてみえる。だが、男性の歩揺冠は、寡聞にして上記「江充伝」しか知らないし、歴代の正史の「輿服志」「礼儀志」にも記載がない。江充は趙の人で、自ら請願して常に着用していた歩揺冠で皇帝に見上することを許されていることからすると、この歩揺冠は中国北方民族の影響を受けた物で、中華の冠ではなかったと推測される。

### 3. 金璫 (図2-5~8・13~16、図版2-1・2)

上述した遼西地方の歩揺冠飾を出土した墓からは、一辺6~9cmの金製方形板飾やこれよりやや小型で上端を尖らせた金製や銀製の山形板飾(山形冠飾)が出土する例が多い。後者は後述するように冠の前面につけた「金璫」にあたるが、前者は用法について殆ど触れられることがなく、一部で冠飾とする見解(文献42)がある程度である。

以下では、方形板飾と山形冠飾について分類し、変化を探る。

**方形板飾** 前燕以前の早期慕容鮮卑墓から金製品計5点が出土している。四角の綴孔のある例が多い。2点は北票市房身村2号墓出土例(文献1)で、大型品と小型品(図2-5)がある。ともに龍鳳文を透彫し、歩揺をつける。他の2点は朝陽県甜草溝1号墓出土例(文献51)で、ともに龍鳳文を透彫するが、やや大型の1点(図2-7)は他の1点(図2-6)より文様が硬化し、文様を区画するX線が目立つ。歩揺もやや小型品にだけつく。残る1点は甜草溝2号墓出土例(図2-8)で、透彫や歩揺はなく周縁と中央にX線を突出させるだけである。

こうした簡略化は、前節で触れた花樹状飾の変化とも対応し、3世紀中・後葉から4世紀前葉までの時間差を示している可能性が高い。

**山形板飾** 遼寧省出土の山形板飾は、4基の墓から計6点出土している。うち4点が金製、他は銀製と銅製である。時代は前燕とそれ以前及び北燕である。肩が聳えるか角張るA種と、肩が丸みをもつB種に区分できる。

A種で最も古いのは、289~350年に比定している北票市喇嘛洞I M5号墓出土銅製品である(文献59・61)。これは、遺物出土位置図に示されているにすぎないが、遺骸頭部近くから出土しており、北燕の資料に比してやや縦長で、頂部が突出する(以下、A<sub>1</sub>種)。周縁には列点文らしき表現がある。歩揺冠飾は出土していないようである。扶余人墓の可能性もある(文献61)。

前燕(337~370年)の朝陽県十二台郷88M1号墓出土銀製品は、既述した歩揺冠飾Ⅱ類の近くで出土している(文献50)。これも遺物出土位置図に示されているにすぎないが、喇嘛洞I地区5号墓例よりやや横長で肩が聳え鋸歯状を呈する(以下、A<sub>2</sub>種)。素面か。前燕後期から後燕の4世紀後半頃と推定(文献16・41)する朝陽県姚金溝2号墓出土金製品は、詳細不明だが、

「聳肩」「束腰」で、周縁に2重の列点文を飾り、四角に孔を穿つ。文様や歩揺はないようである。歩揺冠飾は記載がない。

北燕の415年に没した馮素弗墓例は、金製のA種が2点、金製のB種が1点である(文献6)。A種のうち1点は、中央に仏像を表した例(図2-16)で、上辺の曲折がゆるやかである(以下、A<sub>3</sub>種)。唯一、歩揺付であり、四角に綴付孔がある。他の1点も上辺の曲折がゆるやかだが、やや縦長で、主文が蟬文である(以下、A<sub>1</sub>種)。蟬文は後述する南朝の蟬文に比べて硬化している(以下、蟬文Ⅱ類)。歩揺はつかない。同形の裏金には周辺に孔があり、帽に綴付けたと推定できる。

B種は、上述の馮素弗墓例で、A<sub>1</sub>種と類似した蟬文Ⅱ種を飾る(図2-15 図版5-2)。歩揺はつかない。これにも裏金がある。

以上のことから、山形板飾は、前燕以前の289~350年から後燕頃までは肩が強く聳え、周縁に列点文を施す程度(A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>種)であったが、北燕には上辺の曲折がゆるやかで、蟬文や仏像が主文様(A<sub>3</sub>・A<sub>4</sub>種)となり、新しくB種も登場することになったと推測できる。A<sub>1</sub>種とB種は中国で冠に用いた金璫にあたる。

**金璫の系譜** 『後漢書』「輿服志」の武冠条は、諸武官が2本の鶡尾をさした武冠、別名「武弁大冠」を冠したこと、とくに侍中と中常侍が武冠に蟬文の「黄金璫」を付け、前に「貂尾」を挿したことを記す。またこれらは、趙の武靈王(前325年~前299年)が胡服にならって貴職に採用し、秦にも及んだことも記す。『後漢書』「朱穆伝」中の「貂璫之飾」に対する釈註は「璫以金為之、當冠前以附金蟬也」とあり、冠に用いる璫は大冠(籠冠)の内に被った平巾幘の前面に付けたとみるのが通説である(文献80)。『後漢書』「輿服志」では、鶡は勇雉で武士を表すとし、その釈註では應劭の「漢官」を引き、蟬は清高、貂は勁悍であるゆえとする。

なお、『南齊書』「輿服志」の武冠条に引く項氏説として漢代の侍中は璫に蟬像を刻したが、常侍は「不蟬」とあり、『隋書』「礼儀志」の貂蟬条に引く「董巴志」(三国時代の董巴条撰による大漢輿服志)には内常侍は「右貂 金璫銀付蟬」とあり、同じ侍臣でも差のあったことがわかる。

『晋書』「輿服志」も『後漢書』と同様だが、その記載から貂尾は黄金の「竿」に付したこと、貂尾を侍中は左、常侍は右に挿していたことがわかる。以後、南朝や北朝でも、『旧唐書』「車服志」でも、侍臣の武冠(武弁)が「貂璫」を飾ることに大きな差異はない。注目すべきは『新唐書』「車服志」が「黄金璫付蟬 貂尾」とする侍臣を進賢冠の条文に含めていることである。この問題については考古資料をみただで改めて検討する。

遼寧省以外の「璫」の考古資料をみると、古い時期では東晋(317~420年)早期の江蘇省南京市仙鶴觀墓出土金製品(図2-13)、五胡十六国の前涼の4世紀中頃にあたる甘肅省敦煌墓出土金製品(文献7)やこれに類似した日本の白鶴美術館蔵金製品(図2-14)などがある。前二者は遼寧省例で分類した415年の馮素弗墓の山形板飾のB種、後二者はA<sub>1</sub>種に似るが、ともに頂部が高く、蟬文も写実的である(以下、蟬文Ⅰ種)。西晋以前の蟬文金璫は、数が限定される

こともあってか確認されていないが、既述した遼寧省例も参考にすると、形状については古いほど頂部が高くかつ肩も聳えていたこと、そして中国北辺部ではA種が主流で、なで肩のB種は中華の地でかなり限定された時期に盛行したことが推測される。というのは、516年に建立され、534年に焼亡した北魏・永寧寺出土塑像の武冠の璫(図2-11)にA種系統がみられるからである。頂部が尖り、細身なのが特徴である。時代は降るが、開元12年(724)に没した唐・恵庄太子陵壁画の侍臣の冠も蟬文を飾ったA種の系統のようである(文献46)。参考資料ながら唐・閻立本の摹本が示す隋・文帝の最高級の冠である袞冕(図3-1)にも蟬文を飾ったA種の系統がある。これらは上部が三角形で、幅広なのが特徴である。

上述の恵庄太子墓の侍臣の冠を報告者は「武弁大冠」とする。この冠の外はいわゆる籠冠であるが、内の幘は後端が丸くなる武官用の平巾幘か、後端が二山形になる文官用の黒介幘かは、彩色が剥離していて写真では確認できない。後者とする、『新唐書』が侍臣の冠を、黒介幘に梁飾を付す進賢冠の条文に加えたことも理解できる。こうした形制は、527年に妻と合葬された北魏・甯懋墓石棺刻画の貂尾などを挿した冠(図3-2・3)にすでにある。侍臣のなかでも文官系であることを示すのであろう。

#### 4. 歩揺冠の構成と意匠の由来

**歩揺冠の構成** 第2節で述べたように、遼西地方の歩揺冠飾は、前燕以前の3世紀中・後葉～4世紀前葉に牌座を冠本体の前面に付けたとみるⅠ類が盛行するが、前燕(337～370年)、後燕(384～409年)と北燕(409～436年)では冠頂に立てるⅡ類そしてⅢ類に変化している。他方、第3節で述べたように板飾は、3世紀中・後葉～4世紀前葉に方形板飾が盛行するが、4世



1. 唐・閻立本「歴代帝王図」隋・文帝像(宋代摹本) 2. 北魏・甯懋像(527年合葬) 3. 北魏・甯懋像(527年合葬) 4. 高句麗・双楹塚騎人(5C末) 5. 唐・章懐太子墓朝鮮使(706年)

図3 古代中国・朝鮮の冠参考資料

紀前葉頃に山形板飾が登場し、以後は山形板飾だけになってしまう。以上の各時期の歩揺冠飾と板飾は、各々が共伴する場合が多く、冠飾のセットであることを窺わせる。板飾のなかでも山形板飾は、古い時期のA<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>種が頭部近くで出土していること、新しいA<sub>3</sub>種やB種が中国の史書に記載する金璫にあたることから、いずれも冠飾でしかもその前面下端部に付けたとみて誤りが無い。これらに伴う歩揺はⅡ・Ⅲ類であり、初現は前燕になる。

北燕・馮素弗墓の歩揺冠飾Ⅲ類に伴う山形板飾について、黎瑤渤(文献6)は仏像を表したA<sub>3</sub>種と推定したが、蟬文のB種をあてる例(図版5-1、文献59)もある。馮素弗墓壁画には中華の服制によった進賢冠の官吏も描かれている(文献6)。蟬文の山形板飾は墓主としてふさわしい中華の武冠用<sup>8</sup>で、北方民族の伝統を引く歩揺冠飾Ⅲ類には山形板飾A<sub>3</sub>種と推測する。前者には貂尾の伴っていた可能性もある(文献6)。

方形板飾で出土位置が確かなのは、朝陽県甜草溝2号墓の遺体(女性と推定)腹部例だけである。だが既述したように、1996年に徐秉琨(文献42)は北票市房身村2号墓の方形板飾を冠飾と推定している。方形板飾は、後述するように日本や朝鮮では頭部から出土しており、遼西でも山形板飾に先行する冠飾として冠前面に付けられた可能性が高い。

方形板飾と歩揺冠飾Ⅰ類が各1点の場合は、冠前面下部に方形板飾、この上に歩揺冠飾を付けたと推測できるが、房身村2・8号墓や朝陽県甜草溝1号墓では、歩揺冠飾が2点出土している。後者について2002年の『三燕文物精粹』では、方形板飾に触れず、冠前面に歩揺冠飾2点を一部重ねるようにして付けた「一冠双飾」案を示している。上述の歩揺冠飾は、いずれも大小があり、小を下、大を上とする。房身村8号墓の方形板飾の有無は不明だが、他の2基の墓では方形板飾も大小2点あることから、「一冠一飾」が2点あったと私は推測する。一人の副葬者の墓から複数の冠が出土する例は馮素弗墓がある。上記3墓もそうした例で、大型品が晩年の冠、小型品がそれ以前の冠であろう。

第2節で述べた拓跋鮮卑の北魏の歩揺冠飾は、製作技法の相違から、馬面形牌座例2点の冠と、牛面形牌座例2点の冠の計2冠と推定できる。各冠の歩揺冠飾は形・寸法とも同じであり、冠の左右か前後に取付けたことになる。

**意匠の由来** 既に触れたように歩揺や歩揺冠飾の源流については、1991年の孫機(文献33)が先人の論述を踏まえ前2～1世紀の中央・西アジア例に求めている。その好例は、南ロシア・ノボチェルカスク出土のサルマート族の金冠(文献33)で、冠帯上には歩揺飾とこれに向き合う角鹿(あるいは訓鹿)などを配置している。歩揺冠飾は、枝が対生で、葉を歩揺としており、生命の水を与える聖樹といわれている(文献82)。遼西地方の歩揺冠飾Ⅰ類も枝が対生であり、聖樹を示し、歩揺も葉の簡略表現とみるべきであろう。牌座の上に聖樹を置く例は、ウクライナ・アレクサンドロポル出土のサルマート族の歩揺冠飾(文献33)があり、源流が中央・西アジアにあったことを暗示する。

北魏の歩揺冠飾は、牌座が馬・牛で、これに鹿角をつけており、聖樹思想とは異なる。こ

の鹿角に歩揺がつくのは異質であり、拓跋鮮卑の動物崇拜思想に歩揺の影響が及んだことを暗示する。

板飾の蟬文は既述したように官吏の「清高」を示す。これは漢人社会での理解であって、胡服にならったとする趙・武靈王(前325～前299年)時の冠の金璫に蟬文があったか否かは問題である。遼西地域の板飾でみると、蟬文は古い時期にはなく、むしろ中華の影響がやや遅れて波及したこと、形も古くは方形でやがて山形に変化したことが推測される。

#### IV 周辺国への波及(図4)

**動物意匠** 朝鮮には鳥や牛角の冠飾がかなり出土しているが、日本では鳥や鳥翼を飾るものが若干ある程度である。

鳥全体を表現した冠飾は、いずれも板状で、立体的ではない。朝鮮では、高句麗の5・6世紀の龍湖洞1号墳出土鍍金銅製品(図4-2)、新羅の5世紀第3四半期の慶州・金冠塚出土金銅製品(文献73)があり、帽に付けたと推定している。前者は、鳳凰のようで、歩揺も飾る。新羅の5世紀末～6世紀初の慶州・瑞鳳塚出土金冠は、帽頂の歩揺付樹木形飾上に鳥を表現する(図4-6)。日本でも歩揺付樹木形飾上に鳥を配した6世紀後半の例(図4-11)がある。

鳥の翼や羽を表現した冠飾は、朝鮮半島では類例が多く、高句麗・新羅・伽耶にあり、史料によると百済にもあった(文献87・88・90・91)。代表例をあげる。高句麗では、5世紀末頃の双楹塚壁画(図3-4)にみるように、尖った帽の側面に二鳥羽を挿す場合が多い。身分が高くと、5・6世紀の鎧馬塚壁画の墓主の冠(文献72)やこれと類似する集安出土鍍金銅製品(図4-1)のように鳥翼の中央に孔雀の尾羽を加え、歩揺を飾る。新羅の5世紀中頃の慶州・皇南大塚南墳出土銀冠(図4-5)は、中央に山形板飾、左右に鳥翼を配置する。これらの冠飾を合体させたのが同墳出土金冠飾(図4-3)で、尖った帽の前面に挿し込む。新羅冠飾の一つの主流である。他に新羅では小型の鳥翼冠飾(図4-13)もある。高麗大学校所蔵品には眉庇付冑の左右に鉄製の鳥羽、中央に山形板飾をつけた5世紀の例(図4-12)もある。日本では5世紀末～6世紀に鳥羽を飾った冠や冑の上に鳥翼を飾った武人埴輪がある(文献87)。

牛角は、新羅の慶州・金冠塚出土金製品(文献73)や6世紀第1四半期の慶州・天馬塚出土金製品(文献67)などがあるが、例は多くない。前者は立体的で帽の左右に嵌め込むようにしたのかもしれない。

以上の冠飾を通観すると、鳥や牛に対する崇拜や畏敬は、朝鮮と遼寧・内蒙古などの中国北方民族と相通じる<sup>9)</sup>が、冠飾の形状はかなり異なることがわかる。古代朝鮮では、ほぼ全域で尖った帽が採用されており、その源流は北蒙古ノイン・ウラ匈奴墓などに求められる

(文献77)。とすれば、遼寧省よりさらに北方からの文化伝播、間に介在する扶余などとの関係も視野に入れた検討を、今後試みる必要がある。他に新羅では、5世紀中頃から鹿角形冠飾(文献71)が登場し、以後6世紀まで存続する(図4-7・10)。北方起源(文献82)とするが、その究明も今後の課題である。

**歩揺冠飾と聖樹** 枝を対生にした樹木形飾は、朝鮮では5世紀前半に新羅(図4-4)や伽耶(図4-8)に登場し、百済では5世紀第3四半期の例がある(文献91)。新羅では5世紀中頃から枝が直角に折れる特有の形状(文献71)に変化し、5世紀後半(図4-10)そして6世紀にも存続(図4-7)する。この影響を受けた6世紀第1四半期の伽耶の冠は、半球形の帽頂に簡略化した樹木形飾も付す(図4-16)。以上の樹木形飾は、いずれも歩揺を付しており、慕容鮮卑の歩揺文化と聖樹思想の東伝を窺わせる。ただし、その形状や用法は慕容鮮卑とはかなり異なっている。間に介在する高句麗や扶余の様相が明らかになれば、系譜が解明されると期待される。

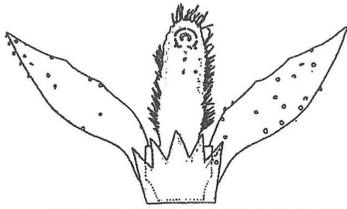
日本では、歩揺付の樹木形飾は5世紀中頃の福岡・稲童21号墳出土土眉庇付冑に飾られた例が初現(文献87)で、6世紀中頃の鍍金銅製冠(図4-9)に続く。朝鮮半島からの伝播であり、5世紀末から6世紀初～7世紀前半には百済の影響を受けた新形式の歩揺冠も展開する(図4-11)。

**金璫と貂尾** 方形板飾は、朝鮮では526年に没した百済・武寧王妃の頭部(図4-17)、日本では5世紀後半の奈良県新沢千塚126号墳の遺骸頭部(図4-16)から出土しており、帽の前面に付けたと考えている(文献87)。ともに歩揺を付す。遼寧省例とは1世紀以上の時期差があるが、高句麗や百済での存続を考慮すれば、日本までの伝播がそれほど隔絶したことはない。高句麗の5世紀末頃の双楹塚壁画にみる冠前面の方形に近い表現(図3-4)、新羅5世紀中頃の尖った帽前面にある方形板(図4-13)も参考になる。

山形板飾は、すでに触れたように、5世紀中頃の新羅の慶州・皇南大塚南墳の冠(図4-5)にもある。類似した冠飾は、高句麗の冠(図4-1)などにあり、5世紀後半～6世紀前半の百済出土例(図4-19)や日本の5世紀後半～6世紀初出土例(図4-18)にもある。さらに、7世紀初百済出土例(図4-20)や706年に没した唐・章懐太子墓壁画中の朝鮮使と推測される人物の冠前面(図3-5)にも残る。用法は多様であるが、冠の前面を飾った「璫」が意識されたとみてよい。だが、いずれも蟬文はない。

蟬文をもつ璫は、『日本書紀』の大化3年(647)条に「以縁與鈿 異其高下 形以於蟬」とあり、7世紀中葉に新しい冠制として採用されたと推測される<sup>10</sup>。朝鮮では、新羅が649年に衣冠を唐風に改めているが、新羅や百済はすでに7世紀前半に遡って腰帯を中国化(文献94)しており、蟬文璫が日本より早い時期に採用されていた可能性もある。

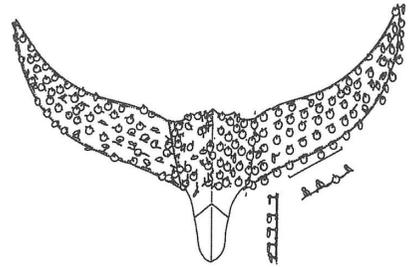
貂尾を如実に示すのは、527年に合葬された北魏・甯懋墓の石棺刻画(図3-2)であり、武冠の右に挿している。遺物としては、その竿かとする例が、既述した北燕・馮素弗墓(文献6)



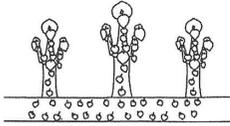
1. 高句麗・集安出土鍍金銅冠飾 (5・6C)



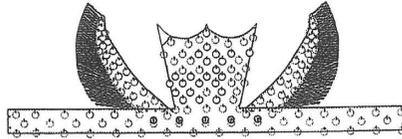
2. 高句麗・龍湖洞1号墳鍍金銅冠飾 (5・6C)



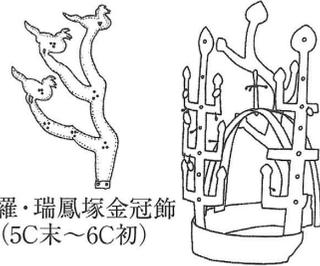
3. 新羅・皇南大塚南墳金冠飾 (5C中頃)



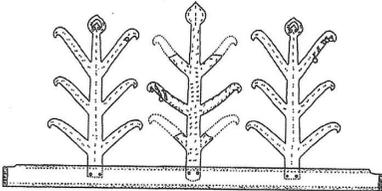
4. 新羅・校洞廢墳金冠 (5C前半)



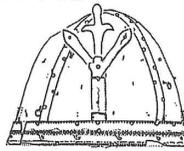
5. 新羅・皇南大塚南墳銀冠 (5C中頃)



6. 新羅・瑞鳳塚金冠飾 (5C末~6C初)

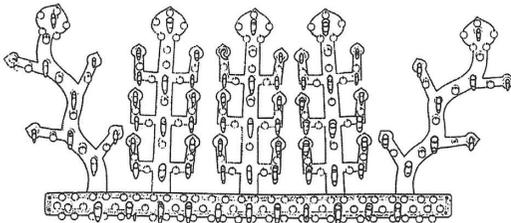


8. 伽耶・福泉洞11号墳鍍金銅冠 (5C第2四半期)

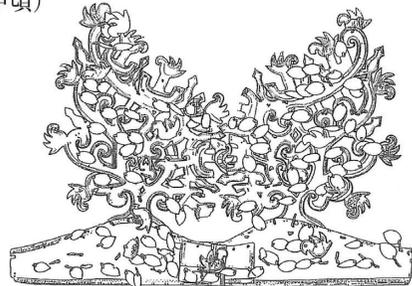


9. 日本・王墓山古墳鍍金銅冠 (6C中頃)

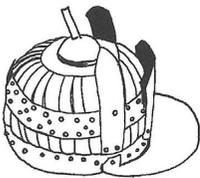
7. 伽耶・達西37号墳鍍金銅冠 (6C第1四半期)



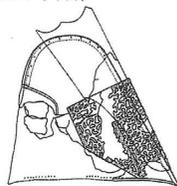
10. 新羅・皇南大塚北墳金冠 (5C第3四半期)



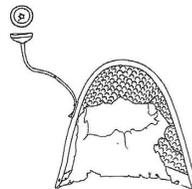
11. 日本・藤ノ木古墳鍍金銅冠 (6C後半)



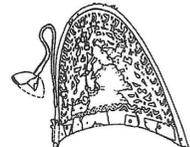
12. 朝鮮出土鉄青 (5C)



13. 新羅・皇南大塚北墳金冠 (5C第3四半期)



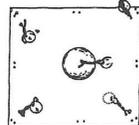
14. 百濟・笠店里1号墳鍍金銅冠 (5C第4四半期)



15. 日本・江田船山古墳鍍金銅冠 (5C末~6C初)



16. 日本・新沢千塚金璫 (5C後半)



17. 百濟・武寧王妃銀璫 (6C前葉)



18. 日本・亀塚鍍金銅璫 (5C末~6C初)



19. 百濟・武寧王金璫 (6C前葉)



20. 百濟・中上塚鍍金銅璫 (6C末~7C中葉)

図4 朝鮮・日本の冠

2・9・13~15 1:8 16~20 1:6  
3~5・7・8・10~12 1:10

から出土しているにすぎない。

貂尾とは異なるが、甯懋の若年像とされる石刻像の冠(図3-3)には、先端に総飾をつけた竿が表現されているのが注目される。同様の例は、724年に没した唐・恵庄太子墓壁画の蟬文金璫を付した冠(文献46)にもあり、侍臣のシンボルと言える。こうした総飾をもつ例は、朝鮮では百済の5世紀第4四半期の尖った帽(図4-14)にみられ、これが日本にも波及する(図4-15、文献87)。この総飾が何かは明らかでないが、参考となるのは『日本書紀』の推古19年(611)条に記載する冠飾の「豹尾」である。これは、日本の古い冠を再序列化したなかの冠飾の一つ(文献87)で、上述の総飾の可能性が高い。『三国志』の『魏書』『東夷列伝』には、高句麗北方の「勿吉国」(肅慎あるいは靺鞨)では男子が頭に「武豹尾」を挿したとあり、貂尾と同様に、北方の習俗が中国や朝鮮さらには日本に波及したと考えられるが、その究明は今後に期待したい。

本論の図面作成及び原稿の文字入力については八木あゆみさんの協力を得た。中国正史の理解については奈良文化財研究所渡邊晃宏氏の助言を得た。感謝致します。なお、巽弘子さんには、10年ほど前にスキタイやフン(匈奴)の冠についてロシア文献資料の翻訳をしていただいたが、その成果の十分な活用まで至らなかったことをお詫び申し上げます。

## 註

- 1 沈從文(文献18)は、安陽小屯例を高冠の通天冠と推測するが、本論図1-6の玉人の表現は髪とみている。林巳奈夫(文献79)は本論図1-8のような羽状飾を鳳凰の羽とみている。
- 2 安志敏(文献4)は、髻頭は後の契丹人のように頭頂を剃って四周を残したもので、匈奴のような弁髪と異なるとする。だが、李逸友(文献13)は後漢晩期の和林格爾壁画墓例から、烏桓や鮮卑の髻頭は四周を剃りって頭頂を残したと推測している。
- 3 冠飾の人物・動物像からすると西方起源で、ササン朝ペルシャの三日月形冠帽飾(文献76)の影響かもしれない。
- 4 他に、新疆自治区吐魯番の前漢相当期(車師前国)の墓からは、三日月状の金製冠飾らしきものが出土している(文献92)。
- 5 16点とするが、房身村1号墓は2号墓の重複であり、14点となるようだ。
- 6 金線の類似した歩揺冠飾は、1世紀頃のアフガニスタン・大月氏墓(文献33)にある。また、金線を用いた歩揺飾は、前燕以前289~337年に比定する喇嘛洞墓の耳飾にもある(文献64)。
- 7 朝陽・甜草溝2号墓の鍍金銅製歩揺は棺蓋前端出土という(文献51)。儀式具か。
- 8 朝陽・袁台子東晋壁画墓(文献23)の墓主は武冠を冠する。だが、蟬文璫の表現は見当たらない。
- 9 『三国志』の『魏書』『東夷伝』新羅条には「以大鳥羽送死者 其意欲使死者飛揚」とあり、新羅人自身にも鳥に対する崇拜・畏敬の思想があった。

10 『日本靈異記』第二十五には中納言從三位大神高市万呂が朱鳥7年(692)に「禪冠」を被っていたと記載する。『日本書紀』天武11年(682)条には「位冠」を停めて「漆紗冠」を被る方針を示しており、朱鳥7年(692)の「禪冠」は古制を示す。

## 引用文献

### <中国>

- 1 陳大為 1960「遼寧北票房身村晋墓発掘簡報」『考古』1960年第1期
- 2 和平 1960「我国博物館史の幾つかの珍貴資料」『文物』1960年第8期
- 3 劉謙 1963「遼寧義県保安寺発現の古代墓葬」『考古』1963年第1期
- 4 安志敏 1964「内蒙古札賚諾爾古墓群の族属問題に関して」『考古』1964年第5期
- 5 河南省文物局文物工作隊 1964「洛陽西漢墓発掘報告」『考古学報』1964年第2期
- 6 黎瑤渤 1973「遼寧北票県西官営子北燕馮素弗墓」『文物』1973年第3期
- 7 敦煌文物研究所考古組 1974「敦煌晋墓」『考古』1974年第3期
- 8 内蒙古文物工作隊・内蒙古博物館 1975「呼和浩特市附近出土の外国金銀貨」『考古』1975年第3期
- 9 宿白 1977「東北、内蒙古地区の鮮卑遺迹－鮮卑遺迹輯録の一」『文物』1977年第5期
- 10 宿白 1977「盛楽、平城一帯の拓跋鮮卑－北魏遺迹－鮮卑遺迹輯録の二」『文物』1977年第11期
- 11 楊泓 1978「甲と鏡」『文物』1978年第5期
- 12 河北省文物管理处 1979「河北省平山県戦国中山国墓葬発掘簡報」『文物』1979年第1期
- 13 李逸友 1979「札賚諾爾古墓は拓跋鮮卑遺迹とする論」『中国考古学会第一次年会論文集』
- 14 郭建邦 1980「北魏甯懋石室と墓誌」『河南文博通訊』1980年第2期
- 15 田廣金・郭素新 1980「内蒙古阿魯柴登発現の匈奴遺物」『考古』1980年第4期
- 16 孫国平 1981「試談 鮮卑族の歩揺冠飾」『遼寧省考古、博物館学会成立大会会報』
- 17 董高 1981「朝陽地区出土鮮卑馬具の初歩研究」『遼寧省考古、博物館学会成立大会会報』
- 18 沈從文 1981『中国古代服飾研究』
- 19 戴応新 1983「陝西神木県出土匈奴文物」『文物』1983年第12期
- 20 陳大為 1983「“句決”と“髮骨”試析」『遼寧文物』1983年第5期
- 21 夏鼐 1983「漢代の玉器－漢代玉器の伝統的延続と変化－」『考古学報』1983年第2期
- 22 陸思賢・陳棠棟 1984「遼茂旗出土の古代北方民族金飾片」『文物』1984年第1期
- 23 遼寧省博物館文物隊ほか 1984「朝陽袁台子東晋壁画墓」『文物』1984年第6期
- 24 郭大順・馬沙 1985「遼河流域を中心とする新石器文化」『考古学報』1985年第4期
- 25 田廣金・郭素新編 1986『鄂爾多斯式青銅器』
- 26 李恭篤 1986「遼寧凌源県三官甸子城子山遺址試掘報告」『考古』1986年第6期
- 27 烏恩 1987「試論 漢代匈奴と鮮卑遺迹の区別」『中国考古学会第六次年会論文集』1990
- 28 徐基 1987「鮮卑慕容部遺迹の初歩考察に関して」『中国考古学会第六次年会論文集』1990
- 29 中国社会科学院考古研究所 1989『曾侯乙墓』
- 30 文物出版社 1989『酒泉十六国墓壁画』

- 31 那志良 1990『中国古玉図釋』
- 32 田立坤 1991「三燕文化遺存の初歩的研究」『遼海文物學刊』1991年第1期
- 33 孫機 1991「步搖、步搖冠と搖葉飾片」『文物』1991年第11期
- 34 楊美莉 1993「新石器時代北方系環形玉器 四」『故宮文物月刊』11-9
- 35 杜金鵬 1994「臨朐朱封龍山文化玉冠及び相關問題論」『考古』1994年第1期
- 36 杜金鵬 1994「說皇」『文物』1994年第7期
- 37 韓立新 1994「錦西沙鍋屯發現春秋晚期墓葬」『遼海文物學刊』1994年第1期
- 38 田立坤・李智 1994「朝陽發現の三燕文化遺物及び相關問題」『文物』1994年第11期
- 39 寧夏文物考古所ほか 1994「西吉県陳陽川墓地發掘簡報」『寧夏考古文集』
- 40 朝陽市博物館編 1995『朝陽歴史と文物』
- 41 董高 1995「公元3至6世紀 慕容鮮卑、高句麗、朝鮮、日本馬具の比較研究」『文物』1995年第10期
- 42 徐秉琨 1996『鮮卑・三国・古墳』
- 43 孫慶偉 1996「西周佩玉考」『文物』1996年第9期
- 44 中国社会科学院考古研究所 1996「鄴南城出土の北朝甲冑」『考古』1996年第1期
- 45 中国社会科学院考古研究所 1996『北魏洛陽永寧寺』
- 46 陝西省文物研究所 1997『陝西新出土唐墓壁画』
- 47 杜金鵬 1997「試論 北京琉璃河西周墓出土の玉冠飾」『文物季刊』1997年第4期
- 48 遼寧省文物考古研究所 1997『牛河梁紅山文化遺址と玉器精粹』
- 49 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館 1997「朝陽王子墳山墓群1987、1990年度考古發掘の主要收穫」  
『文物』1997年第11期
- 50 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館 1997「朝陽十二台鄉磚廠88M1發掘簡報」『文物』1997年第11期
- 51 朝陽市博物館・朝陽県文物管理所 1997「遼寧朝陽田草溝晋墓」『文物』1997年第11期
- 52 白榮金 1998「西安北郊漢墓出土鉄甲冑の復原」『考古』1998年第3期
- 53 杜金鵬 1998「紅山文化“勾雲形”類玉器探討」『考古』1998年第5期
- 54 劉国祥 1998「紅山文化勾雲形玉器研究」『考古』1998年第5期
- 55 趙雅新 1999「科左后旗毛力吐發現鮮卑金鳳鳥冠飾」『文物』1999年第7期
- 56 田小娟 2001「商周冠式初探」『考古与文物』2001年第4期
- 57 南京市博物館 2001「江蘇南京仙鶴觀東晋墓」『文物』2001年第3期
- 58 烏恩 2002「歐亞大陸草原早期游牧文化の幾つかの思考」『考古學報』2002年第4期
- 59 遼寧省文物考古研究所 2002『三燕文物精粹』
- 60 馬利清 2003「内蒙古鳳凰山漢墓壁画二題」『考古与文物』2003年第2期
- 61 田立坤 2003「北票喇嘛洞三燕文化墓地の幾つかの問題」『遼寧考古文集』
- 62 万欣 2003「鮮卑墓葬、三燕史迹と金步搖の發現と研究」『遼寧考古文集』
- 63 吉向前 2003「紅山文化玉箍形器考弁」『遼寧考古文集』
- 64 遼寧省文物考古研究所ほか 2004「遼寧北票喇嘛洞墓地1998年發掘報告」『考古學報』2004年第2期
- 65 姜涛 2005「試論 鄂爾多斯戦国墓出土の怪獸形象」『考古与文物』2005年第4期

<朝鮮>

- 66 秦弘燮 1973「百済・新羅の冠帽・冠飾に関する二三の問題」『史学志』7  
67 大韓民国文化広報部文化財管理局 1975『天馬塚発掘調査報告書』  
68 李康七 1980「韓国の甲冑(4)」『考古美術』146・147  
69 文化財管理局 文化財研究所 1985『皇南大塚北墳発掘調査報告書』  
70 申大坤 1991「高句麗金属製一括遺の一例」『考古学誌』3(韓国考古美術研究所)  
71 文化財管理局 文化財研究所 1994『皇南大塚南墳発掘調査報告書』  
72 咸舜燮 1999「考古資料を通して見た我国古代の冠」『三国時代装身具の社会相』

<日本>

- 73 朝鮮総督府 1924・1927『慶州金冠塚と其遺宝』(『古蹟調査特別報告』三上・下冊)  
74 朝鮮総督府 1930『高句麗時代之遺蹟』  
75 朝鮮総督府 1931『慶尙北道達城郡達西面古蹟調査報告書』(『大正十二年度古蹟調査報告』一)  
76 林良一 1958「サーサーン朝王冠宝飾の意義と東伝」『美術史』28  
77 梅原末治 1959「羅州潘南面の宝冠」『朝鮮学報』14  
78 梅原末治 1966『朝鮮古文化綜鑑』四  
79 林巳奈夫 1966「西周時代人像の衣服と頭飾」『史林』第55巻第2号  
80 原田淑人 1967『増補 漢六朝の服飾』  
81 原田淑人 1970『唐代の服飾』  
82 金元龍 1973「新羅金冠の系譜」『アジア文化』9(アジア文化研究所)  
83 樋口隆康 1981「テイラ・テベの遺宝」『仏教芸術』137  
84 宿白 1984「“鮮卑”遺跡研究の現状と新発見」『考古学論攷』10(奈良県立橿原考古学研究所)  
85 林巳奈夫 1989「紅山文化の所謂馬蹄形玉箍について」『史林』第72巻第2号  
86 秋山進午 1993「遼寧省凌源県三官甸子城子山遺跡考古測量調査」『東北アジアにおける文明の源流の考古的研究』(大手前女子大学文学部)  
87 毛利光俊彦 1995「日本古代の冠」『文化財論叢Ⅱ』(奈良国立文化財研究所)  
88 毛利光俊彦 1995「朝鮮古代の冠-新羅-」『西谷真治先生古稀記念論文集』  
89 奈良県立橿原考古学研究所 1995『斑鳩 藤ノ木古墳 第二・三次調査報告書』  
90 毛利光俊彦 1997「朝鮮古代の冠-伽耶-」『堅田直先生古希記念論文集』  
91 毛利光俊彦 1999「朝鮮古代の冠-百済-」『瓦衣千年 森郁夫先生還暦記念論文集』  
92 岡内三眞 2002「交河故城ヤールホト古墓群の調査と研究」『中国考古学』2  
93 後藤健 2002「トルファン盆地における車師前国時代の墓葬」『シルクロード研究』10  
94 毛利光俊彦 2002「古代中国の腰帯」『文化財論叢Ⅲ』(奈良文化財研究所)

<追加>

- 95 朝鮮総督府 1915『朝鮮古蹟図譜』二  
96 張長寿 1987「記豊西新発見の獣面玉飾」『考古』1987年第5期  
97 江西省文物考古研究所ほか 1991「江西新干大洋洲商墓発掘簡報」『文物』1991年第10期  
98 魏凡 1994「牛河梁紅山文化第三地点積石塚石棺墓」『遼海文物学刊』1994年第1期

【图出典】

- 图 1-1：文献98、 1-2·3：文献86、 1-4：文献56、 1-5：文献35、 1-6：文献18、 1-7：文献97、  
1-8：文献18、 1-9：文献96、 1-10：文献3·59、 1-11：文献64、 1-12：文献64、 1-13：文献18、  
1-14：文献15、 1-15：文献19·58、 1-16：文献8
- 图 2-1：文献32·33、 2-2：文献51、 2-3：文献49·62、 2-4：文献51、 2-5：文献32·33、 2-  
6：文献51、 2-7：文献51、 2-8：文献51、 2-9：文献60、 2-10：文献6·33、 2-11：文献45、  
2-12：文献33、 2-13：文献57、 2-14：文献87、 2-15：文献87、 2-16：文献6·9
- 图 3-1：文献18、 3-2：文献18、 3-3：文献18、 3-4：文献95、 3-5：文献99
- 图 4-1：文献72、 4-2：文献74、 4-3：文献71·88、 4-4：文献88、 4-5：文献88、 4-6：文献  
66·88、 4-7：文献33·90、 4-8：文献90、 4-9：文献87、 4-10：文献69·88、 4-11：文献89、  
4-12：文献68、 4-13：文献71·88、 4-14：文献91、 4-15：文献87、 4-16：文献87、 4-17：文献91、  
4-18：文献87、 4-19：文献91、 4-20：文献91